

増田昭三さんへの送別の辞

内 藤 周 式 (分光化学センター)

増田昭三さんは昭和27年東京理科大学理学部化学科を卒業されましたが、東京大学理学部化学教室には昭和25年から技官として在職され、28年間有機分析室で元素分析の業務に従事されました。その後昭和53年理学部附属分光化学センターが設立されると同時にセンターの方に移られ現在に至っております。その間、昭和62年には助手に昇任されました。

このように40年近くの長きに渡って化学教室とその周辺におられた増田さんにとって、今年で東大を去られることは、真に棲み慣れた土地を去るような……そんな事にあたるのではないでしょう。その誠実温厚なお人柄は増田さんに接した誰もが感じることであり、元素分析や分光化学センターの装置のことでお世話になった方々もずいぶんと多いと思います。さらにここ10年位は化学科の4年生の物理化学実験のお世話もなさってこられ、その懇切丁寧な対応に感激した学生諸君も多かったのではないかと思います。このように増田さんは技官として非常に有能な方であり、その定年退職は分光化学センターとしても化学教室としても非常に残念なことです。

増田さんは技官としての業務を続けられる傍ら、有機化学に関する御自身の研究テーマを持ってこつこつと研究を続けてこられました。最初のうち

はその業務環境を生かした元素分析の研究や、天然有機化合物「苦木の成分」の研究を続けておられました。やがて机上ですらでもできる「有機化合物の置換基効果に関する経験則」を確立しようという意欲的な仕事に取り組みられました。主に核磁気共鳴法における炭素13の化学シフトの置換基効果に着目し、置換基原子の物理量（有効核荷電、有効主量子数）に基づき新しい誘起置換基数を提出され、経験的ハメット則（直線の自由エネルギー関係則）の中に電気陰性度に基づき概念を新たに導入されました。この業績により昭和55年には東京大学より理学博士の学位を得られ、長年の努力を結実されております。

増田さんのことでもう一つ特筆すべきことは、書道に堪能でいらっしゃることです。化学教室や分光化学センターで催し物があると看板等の毛筆は増田さんをお願いしようというのが常識でしたが4月からはどうなるのか心もとないところです。余暇には音楽会を楽しまれたり、昔は油絵をたしなまれたこともある由、これからはもう少しそんな時間も増せるのではないかと思います。「置換基効果」の研究の方も今が佳境だそうで今後も続けられるようですが、健康にくれぐれも留意され、多方面での増々の御活躍を心からお祈り申し上げます。